

ライフストーリー・インタビューを用いた異文化理解教育 ——留学生と日本人学生の共修授業における実践の報告——

佐藤 智照

1. はじめに

ライフストーリー・インタビューは、人生や過去の経験をインタビューすることによって、対象者のアイデンティティや社会を理解するための質的調査法の一つである（中川,2009）。

中川（2009）は、大学生が中高年へライフストーリー・インタビューをすることで、どのような学びが生じるのかについて、インタビュアー（インタビューをする人）の観点から検討を行った。活動を行った大学生の感想文を分析した結果、「尊敬・親しみや共感」「人生への洞察や人生哲学」「高齢者への理解と固定観念の払拭」「地域や歴史への理解」「異世代とのコミュニケーション」という5つの学びが生じたことがあきらかとなった。

また、日本語学習者を対象に「ライフストーリー（自分史）」を作成する活動を行った尾関（2017）では、学習者が教室で互いのライフストーリーを語り合いながら作成する中で、他者と関係性を築き、その関係性の中で自己と向き合い、自分に自信を持つようになったと述べている。

このような効果が期待できるライフストーリー・インタビューを留学生と日本人学生が共に受講する教養育成科目「異文化理解入門」において実践した。この授業の目標は、コミュニケーションの実践、協働作業を通じて、異文化間コミュニケーションを経験し、自他の文化や社会に関する知識を深め、それぞれを尊重する態度を養うことであった。この目標を達成するために、授業にライフストーリー・インタビューの活動を取り入れた。

本稿では、留学生と日本人学生の共修授業において異文化理解教育の一環として行ったライフストーリー・インタビューの実践報告を行い、留学生と日本人学生が、それぞれどのような学びを得たのかについて検討を行う。

2. 実践の概要

2.1 授業の概要

ライフストーリー・インタビューの活動の目的は、1) ライフストーリー・インタビューを通して、相手のことや相手の文化について知る、2) ライフストーリー・インタビューを通して自分についての理解を深める、3) お互いの価値観や考え方について知り、その背景にあるものを理解する、4) 他者との会話を楽しむ、の4つであった。

この授業の受講者のうち留学生は22名で、国及び地域は、アメリカ、韓国、中国、台湾、ポーランド、ブラジルであった。また日本人学生は、15名であった。ライフストーリー・インタビューの相手は、学生に自由に決めさせた。インタビュー活動は、最大でもインタビュイー（インタビューをされる人）1人に対してインタビュアー（インタビューをする人）2人までとした。表1に各グループの組み合わせを示す。

表1. インタビューの活動の組み合わせ

2人1組	日本×中国	7組	3人1組	日本×日本×ポーランド	1組
	日本×韓国	3組		日本×中国×中国	1組
	日本×アメリカ	1組		日本×韓国×台湾	1組
	中国×韓国	2組			
	ブラジル×中国	1組			

ライフストーリー・インタビューを12週にわたって実施した。毎週1人につき10分～15分間のライフストーリー・インタビューを行わせた。具体的な流れ及びインタビューの話題は、表2のとおりである。

表2. ライフストーリー・インタビューの活動の流れ

第1週目	トータルカルチャーとサブカルチャー
第2週目	0歳～7歳（日本人：0歳～小学校入学）
第3週目	0歳～7歳（日本人：0歳～小学校入学）
第4週目	7歳～13歳（日本人：小学校入学～小学校卒業）
第5週目	7歳～13歳（日本人：小学校入学～小学校卒業）
第6週目	13歳～16歳（日本人：中学校入学～中学校卒業）
第7週目	13歳～16歳（日本人：中学校入学～中学校卒業）
第8週目	16歳～18歳（日本人：高校入学～高校卒業）
第9週目	16歳～18歳（日本人：高校入学～高校卒業）
第10週目	18歳～現在（日本人：大学入学～現在）
第11週目	18歳～現在（日本人：大学入学～現在）
第12週目	将来

インタビューの内容は、学生が自由に決めるよう指示をしたが、ある程度の方向性を示すために質問の例を学生に提示した。第1週目は、インタビュー어의トータルカルチャーとサブカルチャーについて知ることが目的であったため、国籍、出身、年齢、家族構成、趣味を例として提示した。また第2週目以降については、毎回、以下の5つの質問を例にインタビューをするように指示をした。表3に学生に提示した例を示す。

表3. 第2週目以降に学生に提示した質問例

1) その時、どこにいたか。どこに住んでいたか。
2) どんな生活を送っていたか。いつも何をしていたか。
3) どんな思い出があるか。楽しかったこと、悲しかったことなど。
4) その時、一番大事だったものは何か。例：勉強、部活 など。
5) その他。質問したいこと。

2.2 分析データ

分析データとして、受講者に課したレポートの一部を使用した。レポートでは課題の一つとして、ライフストーリー・インタビューの相手から聞いた話の中で自身が異文化だと感じたことを2つ以上紹介し、自身が異文化だと感じた背景や理由に何があるかについて自分の文化にも触れながら書くという項目を設けた。この項目に対して留学生と日本人学生がそれぞれどのような記述を行っているのか分析を行うこととした。分析対象項目についての記述がないもの及び留学生同士のペアについては、分析の対象外とした。最終的に分析の対象となったデータは、留学生14名、日本人学生15名の記述であった。留学生の国及び地域の内訳は、中国9名、ポーランド1名、韓国4名であった。

3. 結果

留学生と日本人学生の自由記述を、KH Coder(Ver.3.Alpha.14b)を用い、テキストマイニングの手法で分析を行った。受講者29名のデータを分析対象ファイルとして、前処理を実行したところ、412の文が確認された。また総抽出語数は、9817語、異なり語数は、1437語であった。本稿では、異文化だと感じた事柄に着目した分析を行うため、名詞（サ変名詞、固有名詞、組織名、地名を含む）を主な手がかりとして用いることとする。

留学生と日本人学生それぞれの語の使用傾向を探るために、KH Coderの特徴語の一覧を作成する機能を用いた。留学生と日本人学生を外部変数として設定した上で、それぞれを特徴づける語としてJaccardの類似性測度を求めた。Jaccard係数は、0から1までの範囲の値をとり、数値が1に近づくほど関連が強いと判断される。Jaccard係数が大きい順に上位10語をリストアップした。その結果を表4に示す。

表4. 留学生と日本人学生を特徴づける語（数値はJaccardの類似性測度）

留学生		日本人学生	
中国	.514	文化	.452
日本	.471	日本	.407
学生	.424	感じる	.381
学校	.395	高校	.316
思う	.389	中学	.286
大学	.375	聞く	.273
違う	.343	勉強	.262
多い	.342	人	.237
勉強	.333	驚く	.226
自分	.323	話	.219

さらに共起ネットワークの機能を用いて、留学生と日本人学生の属性の違いとの関係を描いた。なお、分析にあたっては、出現数による語の取捨選択に関しては最小出現数を10

に設定し、Jaccard 係数については 0.1 以上の語に設定した。その結果を図 1 に示す。なお、図 1 は、留学生と日本人学生、それぞれの属性と強い関連がある語ほど太い線で描写されており、出現数の多い語ほど大きい円で描写されている。

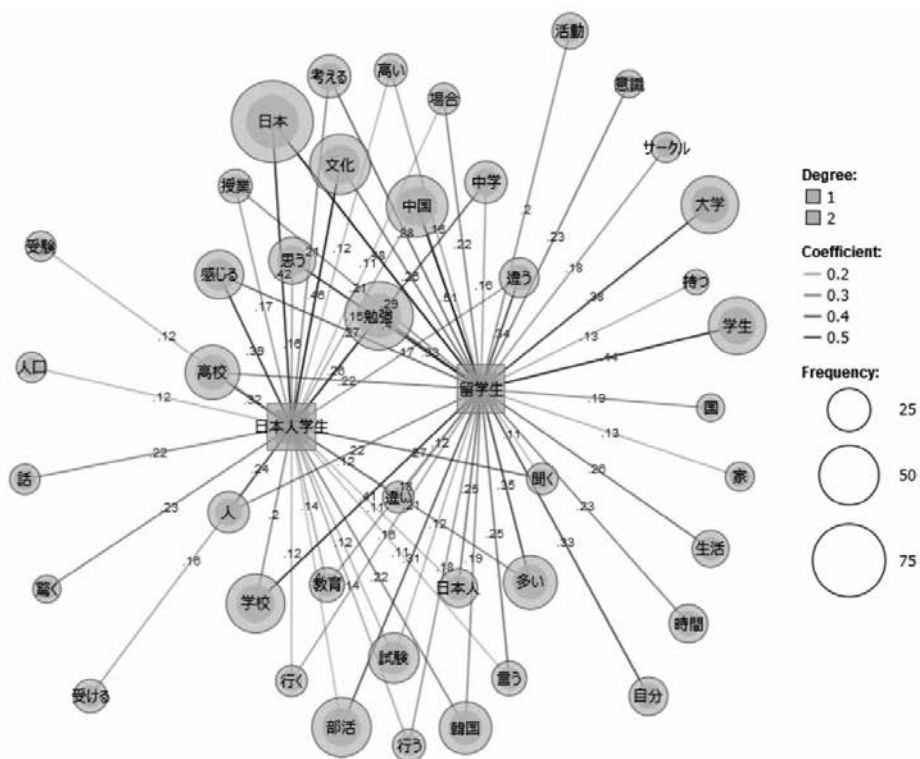


図 1. 共起ネットワーク

図 1 から、留学生においては、「学生 (.424)」「大学 (.375)」「自分 (.323)」「生活 (.258)」「時間 (.226)」「意識 (.233)」「活動 (.200)」「国 (.194)」「サークル (.179)」（括弧内の数値は Jaccard 係数）についての記述が特徴的であることがわかる。また、日本人学生においては、「話 (.219)」「受験 (.125)」「人口 (.125)」（括弧内の数値は Jaccard 係数）についての記述が特徴的であることがわかる。また、「中国（留学生：.514 日本人：.149)」「日本（留学生：.471 日本人：.407)」「学校（留学生：.395 日本人：.200)」「勉強（留学生：.333 日本人：.262)」「部活（留学生：.313 日本人：.103)」「文化（留学生：.250 日本人：.452)」「高校（留学生 .225：日本人：.316)」「日本人（留学生：.242 日本人：.105)」「人（留学生：.211 日本人：.237)」「授業（留学生：.206 日本人：.167)」「教育（留学生：.183 日本人：.143)」「中学（留学生：.158 日本人：.286)」「試験（留学生：.125 日本人：.121)」「韓国（留学生：.125 日本人：.216)」（括弧内の数値は Jaccard 係数）については留学生と日本人学生の両方の記述に共通して用いられている語であることがわかる。

さらに留学生と日本人学生の特徴的な語について見るために対応分析（コレスポンデン

ス分析)を行った。その結果を図2に示す。留学生また日本人学生と関連の強い語はそれぞれの属性の近くに、弱い語は遠くに布置される。また、中心である原点(0,0)付近に布置されている語は、留学生と日本人学生の両者において平均的に出現している語であり、原点からはずれている語が出現の仕方が特徴的な語となっている。

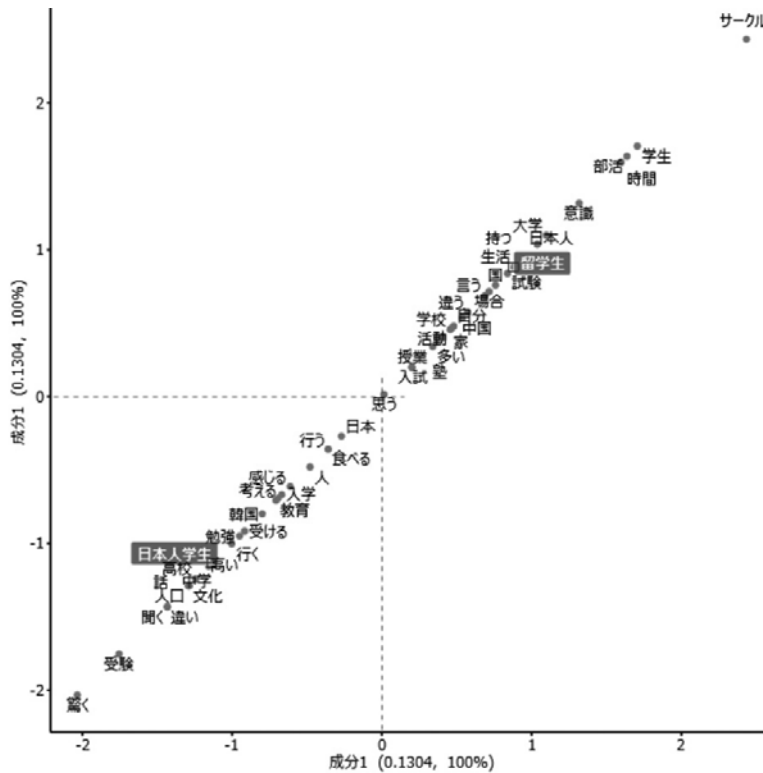


図2. 対応分析の結果

図2から、留学生においては、「大学(.375)」「日本人(.242)」「試験(.125)」「生活(.258)」「国(.194)」「意識(.233)」との関連が強く、特に「学生(.424)」「部活(.313)」「時間(.226)」「サークル(.179)」(括弧内の数値は Jaccard 係数) についての記述が特徴的であることがわかる。一方、日本人学生においては、「韓国(.216)」「勉強(.262)」「人口(.125)」「中学(.286)」「高校(.316)」「文化(.452)」との関連が強く、特に「受験(.125)」(括弧内の数値は Jaccard 係数) についての記述が特徴的であることがわかる。

4. 考察

本稿では、留学生と日本人学生のライフストーリー・インタビューについての自由記述に対して KH Coder を用いたテキストマイニングによる分析を行った。その結果、1) 留学生と日本人学生の両者に共通して用いられている語、2) 留学生の記述に特徴的な語、3) 日本人学生の記述に特徴的な語に分けることができた。以下では、これら3つに分けて考察

を行う。

1) 留学生と日本人学生の両者に共通して用いられている語は、「中国」「日本」「文化」「人」「学校」「授業」「教育」であった。

まず「日本」「中国」「文化」「人」についてであるが、これは課題の特性として記述が多く観察されたと考えられる。すなわち、日本人学生は自身の国「日本」、そして相手の国「中国」について記述することが多く、また留学生にとっては自身の国「中国」、そして相手の国「日本」について記述することが多かったためである。一方、「学校」「教育」「授業」は、全て学校教育と関連がある語である。これらのことから留学生も日本人学生も相手の学校教育と関連がある語りの内容に異文化を感じたことがわかる。大学生ということもあり、語りの多くが学校教育に関連があることだった可能性が高い。具体的な記述を表5に示す。「学校」については、他の学校教育に関連して用いられているケースが多かったため、記述を省略する。

表5. 留学生と日本人学生の両方で共通して用いられている語の具体例

教育	<p>[日本人学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「受験に対する教育機関や学生自身の意識が日本人とは違う。」 ・「(韓国は) スパルタ教育。」 ・「幼稚園から英語教育を受けている。」 <p>[留学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「同じ学生として親とか学校とか教育観念が異なります。日本の学生は自立、責任、集団意識を中心として育てられます。」 ・「中国の学生にとって試験は最も大切なことです。(中略) 授業以外はできるだけ参加しません。これが日本と中国の教育の違うところです。」 ・「日本と韓国の学校生活・教育の違いは、日本は必ずしも大学に行くことが正解であるといった考え方ではなく (中略) 韓国は、とりあえず大学が優先…。」
授業	<p>[日本人学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「中国においては塾というものがほとんどなく、学校の授業と宿題でカバーしている場合がほとんど…。」 ・「(中国では) 入学してからも、朝早くから夜遅くまで授業があり、テストも頻繁に行われる。」 ・「韓国では高校生は授業が終わってからも夜10時過ぎくらいまで学校に残って勉強する。これを夜間自立学習と呼び、大学受験戦争が熾烈な韓国ゆえの制度である。」 <p>[留学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「韓国と日本の学校生活の違いとして部活がある。自分が通っていた韓国の学校の場合は部活やサークルなどの学外活動が活性化されていなかったため授業や自習の思い出以外には学校生活の事についての思い出をあまりもっていない。」

<p>・「母国である韓国での部活の概念は<u>授業</u>の勉強に基づいて作られ、「英語会話グループ」や「数学研究グループ」、「国語論文創作」、「経済部」など主に<u>授業</u>やセンター試験に役立つ<u>授業</u>があってしかもその部活の時間は一週間に一度約50分しか行っていないのです。」</p>
--

これらの記述から、留学生と日本人学生のお互いが、教育の考え方や勉強への取り組み方について異文化だと感じていることがわかる。

また2) 留学生の記述に特徴的な語は、「大学」「生活」「時間」「学生」「サークル」「部活」「試験」「意識」「国」「日本人」であることがわかった。ここでもやはり学校教育と関連がある語が多く観察された。その理由については、前述したことと同様である。しかし、上記の語は、留学生の記述に特徴的な語であるため、留学生の特徴的な気づきと考えてよいだろう。留学生の具体的な記述を表6に示す。「学生」については、学校教育に関連した内容を記述する際に具体的に示すために用いられることが多かった。また、「国」については、自身の国との対比の際に用いられることが多く、「日本人」については、相手のことを述べるために用いられることが多かった。そのため「学生」「国」「日本人」については、省略する。

表6. 留学生の記述に特徴的な語の具体例

大学	<p>[留学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「中国では、<u>大学</u>卒業の後は経済的に独立し、自分で一人暮らしを始める。日本では、大学生になったら、もう独立すべきという意識がある。」 ・「中国の<u>大学</u>はクラス概念がある、学生たちはクラスを単位として、いろいろな活動を行い、サークルの活動も大学管理のもとに制限される。日本の<u>大学</u>は個人を単位して、サークルに参加しなければ社交の場もない。」
生活	<p>[留学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「日本は先進国で、貧富の差が小さく、<u>生活</u>の保障がある。それに反して、中国はまだ発展しているから、自分でもっと努力して<u>生活</u>する必要がある。」 ・「勉強のせいで毎日時間がない韓国学生と違って、就職が難しくない日本では勉強の他に自分の余暇の<u>生活</u>も大事に思っているようだ。」
時間	<p>[留学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「(日本人は) 学校にいる<u>時間</u>はそれほど多くない。家で一人勉強するのも大変だから、塾に通う。中国では塾も多くなってきたが、夏休みなどの自由な<u>時間</u>で行く人が多い。そして、学生はやはり学校で勉強する<u>時間</u>が多い。」 ・「(日本は) 勉強の時間もあれば、剣道のクラブに参加する時間もあります。試験は重要だと思うけど、自由に<u>時間</u>を使うことがもっと重要と言いました。」 ・「中学や高校も部活の<u>時間</u>が多くあるので、サークルに参加するのは日本のキャンパスの文化と思われる。」

サークル	<p>[留学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「(ポーランドでは) 学校や大学の部活なら、スポーツ<u>サークル</u>はあることはあるが、主にサッカー、バレーボール、ピンポンなどだ。」 ・「私の場合は、部活が勉強の重要性に比べてない。<u>サークル</u>に参加するのはただの趣味、生活をつまらなくないようにするためである。」 ・「それと一番気になったのは高校時代の部活や<u>サークル</u>でした。」
部活	<p>[留学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「(日本の) 生徒たちはみんな<u>部活</u>を通じて、趣味や身の回りの知識を身に付けることが可能である。」 ・「ポーランドでは、日本と比べれば、<u>部活</u>がそれほどない。」 ・「(日本人は) <u>部活</u>は勉強と同様にするそうだ。サークルの活動は、生活の中で大切なことである。」
試験	<p>[留学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「全国の受験生は大学センター<u>試験</u>を受けなければならないこと」 ・「(大学進学を希望する) 受験生は、<u>試験</u>を二回受けること」
意識	<p>[留学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本人の独立の<u>意識</u>が中国人より早いからではないか。中国では、大学卒業の後には経済的に独立し、自分で一人暮らしを始める。日本では、大学生になったら、もう独立すべきという<u>意識</u>がある。」 ・「中国では、「生徒の恋愛は勉強に悪い影響を与える」という認識がある。先生も、生徒の両親もそう考えている。日本ではそういう<u>意識</u>はなさそうである。」 ・「中国人の<u>意識</u>の中で、重要なのは子供の数ではなく、性別なのだ。どうしても男の子がほしいという考え方は今も多く存在している。」

これらのことから、留学生は、日本人学生が部活動やサークルに時間を充てること、学生の恋愛、入学試験の制度の違い、大学生の一人暮らしやクラス概念について異文化だと感じたことがわかる。

3) 日本人学生の記述に特徴的な語は、「中学」「高校」「勉強」「受験」「人口」「文化」「韓国」であることがわかった。ここでもやはり学校教育と関連がある語が多く観察された。日本人学生の具体的な記述を表7に示す。「中学」「高校」については、他の学校教育に関連して用いられているケースが多かった。また、「文化」については、異文化だと感じたことを紹介する文で多く用いられていた。また、「韓国」については、相手の国について述べる際に用いられていた。そのため、「中学」「高校」「文化」「韓国」については省略する。

表 7. 日本人学生の記述に特徴的な語の具体例

勉強	<p>[日本人学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「日本の文化には「勉強もその他もこなしてこそ一流」という考えがあることがうかがえる。一方で中国の<u>勉強</u>に対する姿勢は、「試験に受かることこそ至上」という風に見受けられる。」 ・「日本でこれほどの<u>勉強量</u>を強いる学校なんて聞いたことがない。確実に非難が殺到するだろう。しかし、韓国では受け入れられていたそうだ。」 ・「中国と日本の文化の違いを感じた点は、「<u>勉強</u>のレベル」である。Aさん（インタビュー相手）はすべての回（年代）の中で<u>勉強</u>に関連する話題を述べていた。」
受験	<p>[日本人学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「実際に<u>受験勉強</u>に関して日本では学校である程度学び、それ以上の事を学んでいい学校に行きたいなら塾や予備校に行くといった事をして受験の対策をしているが、中国においては塾というものがほとんどなく…」 ・「私が驚いた点をあげてみるとまずは高校<u>受験</u>である。彼女は中学生の初めは不良の子たちとつるみだしたことにより勉強をまったくしなくなってしまいう。」 ・「韓国では部活はそこまで盛んではなく1年生のころからみんな大学<u>受験</u>にむけての準備を始めるため放課後は勉強するそうだ。」
人口	<p>[日本人学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「<u>人口</u>の多い中国では、受験の競争率も高いため、レベルの高い中学や高校に入学する為にはかなり受験勉強をしなければならない。」 ・「中国は<u>人口</u>が世界で一番多い。よって何をするのにも競争率が高くなる。そうすると何を指標に人を選別するのかという部分が「学歴」「知能」というところになってくるのだろう。」

これらのことから、日本人学生は、留学生の国の勉強に対する姿勢や勉強量、受験勉強に対する考えや取り組み方、そして人口と受験や競争社会との関係に対して異文化だと感じたことがわかる。

5. おわりに

本稿では、留学生と日本人学生の共修授業において異文化理解教育の一環として行ったライフストーリー・インタビューの実践報告を行い、留学生と日本人学生が、それぞれどのような学びを得たのかについて検討を行った。

受講生のレポートの記述に対してテキストマイニングの手法を用いて分析した結果、1) 留学生と日本人学生の両者に共通して用いられている語、2) 留学生の記述に特徴的な語、3) 日本人学生の記述に特徴的な語に分けることができた。これらの語を元に具体的な記述

を分析したところ、留学生と日本人の共通の学び、留学生、日本人学生それぞれの学びについて知ることができた。異文化理解教育を目的としたライフストーリー・インタビューの意義についてであるが、受講生のレポートやテキストマイニングの分析結果から、この活動を通して他者理解が促されることが確認できた。また、他者のことだけでなく、自身のことにまで言及を求めることで、自己と向き合い自身についての理解も深めることができたと考えられる。

ただし、その多くが学校教育に関わる内容であった。これは大学生同士にライフストーリー・インタビューを行わせたためであると考えられる。すなわち、彼らがそれまでの人生の多くの時間を過ごした場所が学校であり、語る内容が学校教育に関わるものが多くなったと考えられる。今後は、取りませ方について再度検討したり、ライフストーリー・インタビューをする相手を地域住民に変えたりと、トピックが偏らないような工夫が必要である。

引用文献

尾関 史 (2017) 「日本語授業としてのライフストーリー活動の可能性—教師と学習者の変化から探る実践の意義—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』9号, 1-9.

中川恵里子 (2009) 「ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性」『生涯学習基盤経営研究』34号, 99-112.